

貨幣史の中のハンザと北海・バルト海交易

—— 現段階の研究水準に基づく試論 ——

菊池雄太

はじめに

ハンザは、教科書的・一般的な解釈では、「13～16世紀に北欧商業で活躍した北ドイツの商人および都市の同盟」とされるが¹⁾、近年ハンザ史の概説書を著した高橋理は、ハンザの定義について検討した上で、以下のように述べた。「ハンザは国際法上の同盟でもなければ、団体法上のギルドでもないという結果になる。それでは何かといえば、歴史上ただ一回限りのユニークな存在であったと答えるほかない。それがハンザの本質と意義に最もふさわしい言い方である。」²⁾

これは、ハンザという組織の定義の難しさを鑑みた上での危なげのない落としどころとも言えるが、一方で、暫定的・棚上げ的な印象は否めない。ハンザの解釈をめぐるのは今日に至るまで倦むことなく議論が続けられているのであり、最近では、経済的・商業的機能面に着目してハンザを理解しようとする動きがみられる。たとえばC. ヤーンケにおいては、ハンザは今日の経済学・社会学が“制度 institution”または“組織 organization”と呼ぶものとして把握される³⁾。すなわち、当時の北海・バルト海地方を中心に活動する所属商人たちの取引費用を節約するために適恰的に整えられた仕組み（制度・組織）がハンザなのだという⁴⁾。このような把握の仕方は、制度論とネットワーク組織論を援用してハンザ商業を分析する近年の研究潮流を踏まえたものである⁵⁾。

1) 西川正雄他（編）『角川世界史辞典』角川学芸出版、2001年、759頁、「ハンザ同盟」の項目。

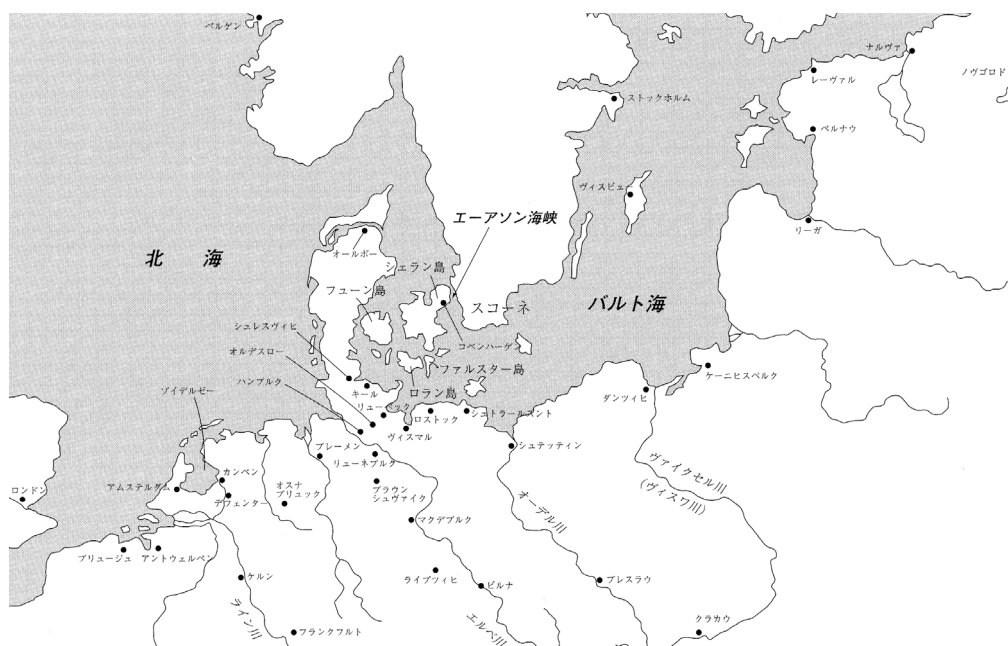
2) 高橋理『ハンザ「同盟」の歴史 中世ヨーロッパの都市と商業』創元社、2013年、31頁。ハンザは、全体を包括する契約・約款をもたない点で厳密な意味での「同盟」ではなく、また、どの都市がハンザに所属しているのかさえも不明瞭な、無定形な組織である。

3) C. Jahnke, *Die Hanse*, Stuttgart: Reclam, 2014, 20.

4) 以上述べた内容の簡略なまとめとして、菊池雄太「ハンザ」森井裕一（編著）『ドイツの歴史を知るための50章』明石書店、2016年、103-105頁参照。

5) とりわけ注目されているのが商人およびその事業経営の特徴である。以下を参照。菊池雄太「ハンザ商人の事業組織をめぐる ネットワーク論と制度論の限界と可能性」『歴史と経済』第60巻第3号（2018年4月）、42-49頁。

上記の研究動向は、つまるところ、ハンザの商業はどのようにして機能したのか、という点に問題意識を置いており、そこから「ハンザの本質と意義」を導き出そうとしていると言える。このことを踏まえると、経済・商業の諸部門に個別的なアプローチをし、そこからハンザの特徴を逐一検討する方法が有効であると考えられるが、そこで大きな研究上の欠落となっているのが、貨幣である。後段で示すように、ハンザ商業の主要舞台となった地域（北海・バルト海地方）についての貨幣史研究には、たしかに古くからの蓄積がある。ところがそこで明らかとされた諸成果は、「ハンザ経済」または「ハンザ商業」を構成する要素としての位置づけを十分に与えられてこなかった。さらに、ハンザ史研究において近年進展が目覚ましい上述の制度・ネットワーク分析、あるいは他地域の貨幣史研究に比して⁶⁾、新たなモノグラフが生まれていない。そこで本稿では、まずは予備的な作業として、これまでの研究史を概観する。当該分野に関しては、系統立てた研究史の整理もなされていないからである。次に、先行研究のサーベイに基づき、ハンザおよび北海・バルト海東西交易の特徴に関わる論点を提示し、それ



(出典) 谷澤毅『北欧商業史の研究 世界経済の形成とハンザ商業』知泉書館、2011年

図1 ハンザ商業圏

6) 近年のドイツ貨幣史研究の中心はライプツィヒ大学と言える。最新の大きな成果は、Ph. R. Rössner, *Deflation Devaluation Rebellion. Geld im Zeitalter der Reformation*, Stuttgart: Franz Steiner, 2012. これは、宗教改革期のザクセンにおける農民戦争の背景を、貨幣の供給量と流通量、流通速度、流通地域の問題から論じたきわめて興味深い著作である。

に対する本稿筆者なりの解釈をほどこし、最後に「ハンザ貨幣史研究」の仮説的な展望を示すことにしたい⁷⁾。

1. 研究史

(1) 古銭学と歴史学・経済史学の合流と貨幣の地域的・時間的定位

20世紀に入って、それまで貨幣タイプの分類に主眼を置いてきた古銭学と、歴史学・経済史学との交流が活発となった。研究手法の面から言えば、出土貨幣そのものを分析対象とするアプローチと並行して、文書史料が積極的に利用されるようになる。このことによって、文書史料に記された名称に基づく貨幣のカテゴライズと地理的分布範囲の確定、さらにそこから貨幣の地域的・時代的位置づけ、歴史的意義づけをすることが可能となり、研究の重点はそちらに移行していった⁸⁾。この動きを主導したのが、W. ヘーフェルニクにはじまるいわゆる「ハンブルク学派」であり、いきおい初期のドイツ貨幣史研究はハンザの主要舞台となった地域を中心に展開されることとなる。

ヘーフェルニク自身は、12世紀以降の神聖ローマ帝国内で進行した貨幣の流通範囲の地域化現象を、ケルンを対象として検出した⁹⁾。帝国諸侯権力の分化・独立化と都市の発達に伴い貨幣製造権がこれらの主体に移譲されたことで起こった、いわゆる地域的ペニヒ/デナリウス貨の生産・流通である¹⁰⁾。世紀半ば頃に、ヘーフェルニクの学派に属する研究者たちが、地域ごとの成果を相次いで発表した。ヴェーザー川流域について P. ベルクハウスが、ホルシュタインについて G. ハッツが、ザクセンについて V. ヤンマーが、ニーダーロートリンゲンおよび

7) 第1節で行われる研究史の整理は、大きな問題軸の潮流の変化に沿う形でなされるため、そこに挙げられる諸文献は網羅的ではない。抜け落ちてしまった重要文献は、第2節で論点整理を行う中で、可能な限り回収したい。

8) ドイツにおいて先駆的業績はすでに19世紀にみられる。H. Grote, *Osnabrück'sche Geld und Münz Geschichte*, Leipzig: Hahn, 1864. ただし本格的な取り組みは20世紀に入ってから始められた。F. Bastian, *Mittelalterliche Münzstätten und deren Absatzgebiete in Bayern*, Berlin: Nauck, 1910. 歴史学・経済史学にとっては、出土貨幣は文書史料の少ない初期中世研究のための貴重な資料となる。H. Gebhart, "Münzfunde als Quellen der Wirtschafts und Kulturgeschichte im 10. und 11. Jahrhundert", *Deutsches Jahrbuch für Numismatik*, 1 (1938), 157-172; P. Berghaus, "Die frühmittelalterliche Numismatik als Quelle der Wirtschaftsgeschichte", *Vorträge und Forschungen*, 22 (1979), 411-429.

9) W. Hävernick, *Der Kölner Pfennig im 12. und 13. Jahrhundert. Periode der territorialen Pfennigmünze*, Stuttgart: Kohlhammer 1930, (Reprint Hildesheim: Georg Olms, 1984).

10) とりわけ諸侯は、地域的権力を形成すると同時に、財政的関心から、貨幣の回収と再生産の際に品位の低い貨幣を生産し、差額となる銀を手中に収めた。B. Sprenger, *Das Geld der Deutschen. Geldgeschichte Deutschlands von den Anfängen bis zur Gegenwart*, 3. Aufl., Paderborn: Ferdinand Schöningh, 2002, 62-63.

フリースラントについて G. アルブレヒトがまとめた調査を行った¹¹⁾。

より直接的にハンザと関係する業績としては、1928年の W. イェッセによる「ヴェント貨幣同盟」の研究が、今日でも参照される古典として位置づけられる¹²⁾。ヴェント貨幣同盟とは、ハンザの中核となったリューベック、ハンブルク、ヴィスマル等のいわゆるヴェント都市が中心となって、1379年以降貨幣の貴金属含有量や流通の管理、貴金属の売買等について取り決めた都市間連合の学術的呼称である。イェッセは700以上にわたる出土貨幣の分析により、出土地、規模、品位等の情報を提示しつつ、規約、協定、証書等の文書史料を利用することで、14世紀から16世紀にかけて貨幣同盟のもとで行われた貨幣生産を詳細に明らかにした。

以上、概して20世紀中頃までの研究が対象としてきたのは、主に貨幣の生産と分布であり、地域的「通貨ゾーン Währungszone」の検出に問題関心の重点が置かれてきたと言える。一方で、ハンザの経済的・商業的側面との関連性は、ほとんど顧みられることはなかった。イェッセはヴェント貨幣同盟の通貨政策、たとえば品位保持、外部地域貨幣の流入規制や貨幣輸出規制等について論じているが、北海・バルト海地方の東西遠隔地交易を視野に収めたものではない。それが転換するのは、20世紀後半である。

(2) 空間的拡大：東西遠隔地交易と貨幣流通

1970年代頃になると、研究の方向性に大きな変化がみられるようになる。20世紀中頃にハンザ史研究の重点が法・政治部門から経済・商業部門に移行し、北海・バルト海東西遠隔地交易の仲介者としてのハンザの役割が前面に押し出されるようになるが¹³⁾、それと軌を一にするように、貨幣研究の枠組みにも空間的拡大がみられた。

その代表が、G. ハッツによる10、11世紀のスウェーデンにおけるドイツ貨幣の分析である¹⁴⁾。初期中世遠隔地交易研究に利用可能な史料が限られていることもあり、ヴァイキング時

11) P. Berghaus, *Währungsgrenzen des westfälischen Oberwesergebietes im Spätmittelalter*, Hamburg: Museum für Hamburgische Geschichte, 1951; G. Hatz, *Die Anfänge des Münzwesens in Holstein. Die Prägungen der Grafen von Schauenburg bis 1325*, Hamburg: Museum für Hamburgische Geschichte, 1952; V. Jammer, *Die Anfänge der Münzprägung im Herzogtum Sachsen (10. und 11. Jahrhundert)*, Hamburg: Museum für Hamburgische Geschichte, 1952; G. Albrecht, *Das Münzwesen im niederlothringischen und friesischen Raum vom 10. bis zum beginnenden 12. Jahrhundert*, Hamburg: Museum für Hamburgische Geschichte, 1959.

12) W. Jesse, *Der Wendische Münzverein*, Lübeck: Verein für Hansische Geschichte, 1927.

13) たとえば A. v. Brandt et al, *Die Deutsche Hanse als Mittler zwischen Ost und West*, Köln / Opladen: Westdeutscher Verlag, 1963. さらに、菊池「ハンザ商人の事業組織をめぐって」、43 44 頁も参照。

14) G. Hatz, *Handel und Verkehr zwischen dem Deutschen Reich und Schweden in der späten Wikingerzeit. Die deutschen Münzen des 10. und 11. Jahrhunderts in Schweden*, Stockholm: Almqvist & Wiksell, 1974.

代のスウェーデン 北部ドイツ交易を知る貴重な成果でもある。すなわち、スウェーデンの出土貨幣から、とくにゴットランド島へのドイツ貨幣輸出が10世紀末から11世紀前半に活発に行われていたことが示された。今日のハンザ史研究では周知のように、当時行われた毛皮やスラヴ人奴隷の東西交易の中心地は、バルト海最大の島ゴットランドの都市ヴィスビューであった。ハッツは、北部ドイツ地域との間の交換形態を出土貨幣によって提示し、さらにドイツ貨が遠隔地交易の交換手段として用いられたことをもって、先述のヘーフェルニクが12世紀以降について設定した「地域的ペニヒ／デナリウス貨の時代」に先行する「遠隔地ペニヒ／デナリウス貨の時代」を、ハンザ形成の基盤となった初期中世北方交易において見出したのである¹⁵⁾。

こうして、神聖ローマ帝国内における政治権力の状態を反映したペニヒ貨流通の仕方の違いを表す「地域的ペニヒ貨」と「遠隔地ペニヒ貨」という学問的類型区分が、史的・考古学的裏付けとともに確立していった。それと同じ頃に、ドイツ貨幣史研究において「貨幣循環」が前面に出されるようになったのは偶然ではあるまい。数量的・統計的手法の適用を特徴とし、特定地域における貨幣流通の仕方を中世から近世にかけて時代の変遷とともに跡付ける研究が相次いで出された。代表的なものとして、東オーストリアについて P. ツェルヴァンカ / P. W. ロート、フランケンについて H. アイヒホルン、ヴェストファーレンについて P. イリッシュの研究が挙げられる¹⁶⁾。

ここに列挙したタイトルは帝国中部・南部地域に関するものであるが、いずれにも共通するのは、対象とする地域の境界ないし範囲が地理的・政治的にある程度特定のであり、かつ統一的な点である。つまり、政治権力、ひいては貨幣製造権および通貨政策の観点からまとまりのある単位を前提として、その内部での貨幣流通、あるいは外部との関係が問題とされる¹⁷⁾。その際は上位の枠組みである神聖ローマ帝国の通貨政策、とくに16世紀の帝国貨幣法との関係が重要な論点となっている¹⁸⁾。

15) ハッツの主張によれば、この時代には貨幣製造権の分散化・地域化はまだみられず、生産されたペニヒ貨は遠隔地交易に使用された。

16) P. Cerwenka / P. W. Roth, *Der Münzumlauf des 16. Jahrhunderts im Raume des östlichen Österreich. Ein Anwendungsbeispiel der elektronischen Datenverarbeitung in der historischen Forschung*, Graz: Akad. Druck und Verl. Anst., 1972; H. Eichhorn, *Der Strukturwandel im Geldumlauf in Frankens zwischen 1437 und 1610. Ein Beitrag zur Methodologie der Geldgeschichte*, Wiesbaden: Franz Steiner, 1973; P. Illisch, *Münzfunde und Geldumlauf in Westfalen in Mittelalter und Neuzeit. Numismatische Untersuchungen und Verzeichnis der Funde in den Regierungsbezirken Arnsberg und Münster*, Münster: Aschendorff, 1974.

17) 日本語によるまとめた成果として、名城邦夫『中世ドイツ・バンベルク司教領の研究 貨幣経済化と地代』ミネルヴァ書房、2000年。

18) 16世紀神聖ローマ帝国の通貨政策に関しては、名城邦夫「近世初期ドイツにおける帝国貨幣法 Reichsmünzordnungen の意義」『名古屋学院大学論集社会科学篇』第38巻第4号（2002年）、59-77頁。

本稿で議論されているハンザの領域では、それとは異なる方向性で貨幣流通が論じられた。すなわち、ハンザの東西交易が展開された広域空間を設定し、そのもとでの貨幣流通を分析するという、政治的ユニットを大きく越えた貨幣の循環と諸地域の経済的相互関係が主題となる。したがって、対象となる地理的枠組みは神聖ローマ帝国領を大きく超えることとなる。

そのような研究としてまず挙げるべきは、1971年にヴィスビューで開催されたシンポジウムをもとに編まれた論集『バルト海地方および北欧における文化と政治』に寄せられた、P. ベルクハウスの論考であり、バルト海地方の諸地域の結びつきが古銭学・貨幣史の見地から明らかにされた¹⁹⁾。彼は、14世紀中葉以降にヴェント貨幣同盟加盟諸都市をはじめとするバルト海地方南西岸地域を中心に製造されるようになったヴィッテン貨（両面打造の4ペニヒ貨）の分布・流通や、諸地域の貨幣生産に及ぼした影響力などから、バルト海地方における同貨幣の受容、支払い流通における重要性を論証した。ヴィッテン貨はヴェストファーレンからニーダーザクセン、メクレンブルク、ホルシュタインからデンマークにまで達する諸地域を結びつけ、独自の貨幣圏、経済圏を形成しており、またデンマーク、スウェーデン、ノルウェーで生産された貨幣にも影響力を与えたと主張された。したがって、イエッセが述べたような、ヴィッテン貨が国際的に重要な交易貨幣ではなかったとする認識は誤りであるという²⁰⁾。ここにおいて、ハンザ盛期の遠隔地交易の媒体となった貨幣が明らかにされたのである²¹⁾。

ハッツやベルクハウスによって基礎づけられたハンザ遠隔地交易における貨幣研究を一挙に深化させたのが、経済史家 R. シュプラントルにより1975年に出された著書である。彼の議論の中心は、13～15世紀のハンザ・北欧地域における体系的な「支払いシステム」にあり、「その構造の分析とダイナミクスの検出」が課題とされた²²⁾。それで論証された個別事項は多岐にわたり、いくつかの論点については本稿で後述する。ここまで述べてきた研究史上の文脈の中に位置づけるとすれば、貨幣史が経済史・交易史というカテゴリーに収められたという点に、

19) P. Berghaus, "Phänomene der deutschen Münzgeschichte des 14./15. Jahrhunderts im Ostseegebiet," in Museum Gotlands Fornsal (ed.), *Kultur und Politik im Ostseeraum und im Norden 1350 1450*, Kungsbacka: Elanders Boktryckeri Aktiebolag, 1973, 81 115.

20) Berghaus, "Phänomene der deutschen Münzgeschichte," 94 95.

21) ベルクハウスの研究に触発され、B. クルーゲがメクレンブルクおよびポメルンにおけるヴィッテン貨製造を論じた。B. Kluge, "Die Wittenprägung in Mecklenburg / Pommern und ihr Anteil am Geldverkehr des Ostseeraums im 14. und 15. Jahrhundert," in J. S. Jensen, (ed.), *Coinage and Monetary Circulation in the Baltic Area c.1350 c.1500*, Copenhagen: Nordisk Numismatisk Unions Medlemsblad, 1982, 90 106. また、当該論文が収められている論集には、G. シュテフケが「模造 Nachprägung / Nachahmung」の観点から、同地域で製造されたヴィッテン貨についてヴェント貨幣同盟のヴィッテン貨との関係に絡めて論じた。G. Stefke, "Silbergeld Probleme im westlichen Ostseeraum, ca. 1380 ca. 1430," in Jensen (ed.), *Coinage and Monetary Circulation*, 58 89. ここで扱われる問題軸は、本稿第2節で論じられる。

22) R. Sprandel, *Das mittelalterliche Zahlungssystem nach hansisch nordischen Quellen des 13. 15. Jahrhunderts*, Stuttgart: Hiersemann, 1975.

当該研究の大きな意義が認められる。出土貨幣はあくまで証明史料のひとつにとどまり、利用可能なあらゆる種類の史料——都市会計書、課税関連文書、教会関連の会計書、造幣特権や造幣契約等——を動員して貨幣の生産・循環と支払いの構造を全体像として描き出そうとしたものであり、とりわけ遠隔地域間の支払いバランスにまで踏み込んだことは、先駆的かつ野心的な試みであると言える²³⁾。

(3) マクロ的経済史研究

シュプランドル以降、経済史家による貨幣を分析対象とするまとまった研究成果は、ハンザないし北海・バルト海地方については長らく現れなかった²⁴⁾。ようやく1989年に、ハンザ後期の北西ヨーロッパを中心とする論集が編集され、そこには古銭学者と並んで多くの歴史家・経済史家が参加した²⁵⁾。そして1990年になって、M. ノルトが本格的な貨幣経済史研究を提出した²⁶⁾。時代的には13世紀から15世紀までを扱ったシュプランドルに接続し、テーマも一見したところでは共通している。しかしシュプランドルにおいては出土貨幣の史料としての役割が相対的に低かったのに対し、ノルトの著作では、そのタイトル——『近代移行期のバルト海南岸地域における貨幣循環と経済循環：リューベックの大埋蔵貨幣、北ドイツ出土貨幣および文書伝承史料を例とした経済史研究』——からも読み取られるように、史料として出土貨幣を精力的に用いて叙述の基礎としつつ²⁷⁾、そこから得られた情報をさまざまな史料や二次文献に基づ

23) ただし、史料裏付けが十分であるかについては疑問が提出された。たとえば F. イルジークラーの以下の書評を参照。R. Sprandel, "Das mittelalterliche Zahlungssystem nach hansisch nordischen Quellen des 13. 15. Jahrhunderts" *Zeitschrift für Historische Forschung*, 5 3 (1978), 363 365.

24) ドイツ南部についても同様のことが当てはまるが、J. シュッテンハイムにより1987年に刊行された博士論文は、そのような停滞を打ち破るものであったと言える。J. Schüttenhelm, *Der Geldumlauf im südwestdeutschen Raum vom Riedlinger Münzvertrag 1423 bis zur ersten Kipperzeit 1618. Eine statistische Münzfundanalyse unter Anwendung der elektronischen Datenverarbeitung*, Stuttgart: Kohlhammer, 1987. さらに日本では前掲の名城『中世ドイツ・バンベルク司教領の研究』が出された。

25) M. North, (Hrsg.), *Geldumlauf, Währungssysteme und Zahlungsverkehr in Nordwesteuropa 1300 1800. Beiträge zur Geldgeschichte der späten Hansezeit*, Köln: Böhlau, 1989.

26) M. North, *Geldumlauf und Wirtschaftskonjunktur im südlichen Ostseeraum an der Wende zur Neuzeit (1440 1570). Untersuchungen zur Wirtschaftsgeschichte am Beispiel des Großen Lübecker Münzschatzes, der norddeutschen Münzfunde und der schriftlichen Überlieferung*, Sigmaringen: Thorbecke, 1990.

27) 本書タイトルにある「リューベックの大埋蔵貨幣 Großer Lübecker Münzschatz」とは、1984年にリューベックの浚渫工事の際に発掘されたもので、395の金貨と23,608の銀貨から成る。当該考古学的史料の経済史研究への利用については、M. North, "Der Großen Lübecker Münzschatz von 1533 als Quelle der hansischen Wirtschaftsgeschichte," *Hansische Geschichtsblätter* 108 (1990), 31 43.

く交易や価格等に関わる数値データと突き合わせる手法を貫いている。また、問題関心の面から言えば、「さまざまな貨幣的・景氣的ファクターが経済全体の発展に及ぼした影響を地域的次元から分析する」ことが当該研究の目的であり²⁸⁾、マクロ的経済史研究の枠組みが設定されている。

従来のバルト海経済史研究は、(西欧に対する)バルト海地方という経済圏の発展構造について、交易および商品取引における収支バランスと、それと不可分に結びついた社会的な生産関係を中心に考察されてきた²⁹⁾。ノルトはそこに、貨幣的要素を導入したのである。このような枠組みが構築された背景のひとつには、1970年以降、とりわけ1980年代に盛んになった、貴金属の獲得や貴金属フロー(商品交易データに現れない地金の動き)から、諸地域間の経済関係および資本主義的経済発展を読み解こうとする諸研究の潮流があると思われる³⁰⁾。

28) North, *Geldumlauf*, 11.

29) マルクス主義的、従属論的な議論が展開され、それはのちに世界システム論に接続する。その膨大な研究蓄積を列挙することは不可能であるが、代表的な研究者と、私見により選んだ論考を挙げれば、ポーランドのM. マウオヴィスト(M. Małowist, "The Economic and Social Development of the Baltic Countries from the 15th to the 17th Centuries," *Economic History Review*, 2nd ser., 7 2 (1959), 177-189; "The Problem of Inequality of Economic Development in Europe in the Latter Middle Ages," *Economic History Review*, 2nd ser., 19 1 (1966), 15-28; "Über die Frage der Handelspolitik des Adels in den Ostseeländern im 15. und 16. Jahrhundert," *Hansische Geschichtsblätter* 75 (1957), 29-47), A. モンチャック(A. Mączak, "The Balance of Polish Sea Trade with the West, 1565-1646," *Scandinavian Economic History Review*, 18 2 (1970), 107-142; "The Social Distribution of Landed Property in Poland from the Sixteenth to the Eighteenth Centuries," *Third International Conference of Economic History*, 1, Paris: Mouton, 1968, 455-469) H. サムソノヴィチ(H. Samsonowicz, "Changes in the Baltic Zone in the 13th-16th Centuries," *Journal of Economic History*, 4 3 (1975), 655-672), 旧東ドイツのJ. シルトハウアー(J. Schildhauer, "Der Seehandel Danzigs im 16. Jahrhundert und die Verlagerung des Warenverkehrs im nord- und mitteleuropäischen Raum," *Jahrbuch für Wirtschaftsge-schichte*, 3 (1970), 155-178)。

30) とくに以下が挙げられる。J. H. Munro, *Wool, Cloth and Gold: The Struggle for Bullion in Anglo-Burgundian Trade 1340-1478*, Bruxelles: Ed. de l'Université de Bruxelles, 1973; J. H. Munro, "Bullion Flows and Monetary Contraction in Late Medieval England and the Low Countries," in J. F. Richards (ed.), *Precious Metals in the Later Medieval and Early Modern Worlds*, Durham, N. C.: Carolina Academic Press, 1983, 91-158; A. Attman, *The Bullion Flow between Europe and the East (1000-1750)*, Gothenburg: Kungl. Vetenskaps och Vitterhets Samhället, 1981; A. Attman, *Dutch Enterprise in the World Bullion Trade (1550-1800)*, Gothenburg: Kungl. Vetenskaps och Vitterhets Samhället, 1983; M. North, "Bullion Transfer from Western Europe to the Baltic and the Problem of Trade Balances, 1550-1750," in E. v. Cauwenberghe (ed.), *Precious Metals, Coinage and the Changes of Monetary Structures in Latin America, Europe and Asia*, Leuven: Leuven University Press, 1989, 57-63。通貨用金属としての地金供給の問題は、ウォーラーステインの『近代世界システム』第1巻(初版は1973年刊行)でも重視されている。I. ウォーラーステイン(川北稔訳)『近代世界システム 農業

ここで、ノルトの議論の骨子となる、15世紀中葉から16世紀後半におけるバルト海南岸地域の「貨幣循環」と「景気循環」の関係がいかなるものであったのかを、本稿筆者の解釈も含めつつ、抜粋して紹介したい。

周知のようにヨーロッパ経済史の時代区分では、15世紀が（14世紀に引き続く）景気後退期、16世紀が経済成長期とされる。ただしこの全般的動向の説明となる要因は、ヨーロッパの各地域において異なっていたはずである。一方、各地域間の相互影響によって全体的景況局面が形成されたとも言えよう。ノルトはそれを、バルト海南岸という特定地域において、貨幣的要因に注目して説明しようとする。つまり、古銭学的知見に貨幣理論を加えた出土貨幣分析を、物価および景気変動の歴史分析に接合するのである。

具体的には以下の諸項目が検討される。出土貨幣の出所や種類を再構成；出土貨幣に加えいくつかの断片的証拠から貨幣供給量全体を推計；貨幣の埋蔵、とくに農村地域における埋蔵から貨幣流通速度の変化を推定；港湾における徴収税額や発送記録を中心にバルト海南岸地域とヨーロッパ各地域との交易・支払いバランスを検出；物価、賃金、都市の輸出入税徴収額や土地市場の分析などから長期的景気動向を測定。

上記の諸項目の検討をフィッシャーの交換方程式 $MV = PT$ に当てはめつつ、以下のことが主張される。15世紀後半のバルト海南岸地域では、人口要因以上に、貨幣供給量と貨幣流通速度の落ち込みが物価、とりわけ非弾力的な穀物価格の下落に影響を与えた³¹⁾。貨幣流通速度が低下する背景となった取引総量の減少は、人口減少によるものであるが、それは西ヨーロッパに端を発するものであった。それに対し16世紀では、ヨーロッパ全体規模で起こった人口回復に伴い内外需要が高まったことにより貨幣流通速度が著しく増大し、それが価格上昇として現れた。そこでは貨幣供給量の増大は二義的な役割しか果たさなかったという³²⁾。

1990年までの研究史の概観から、ハンザないし北海・バルト海地方の貨幣史研究の潮流は次のようにまとめられるであろう。地域的な貨幣の生産と分布をマッピングすることから始まった貨幣の歴史学的研究は、やがて交易史との合流を経て、地域経済圏のマクロ的分析にまで対象を拡大した。以後の研究上の課題として、ノルトは以下のように述べている。

「総じて言えば、今後の貨幣史研究ではミクロ経済学的な次元での研究が優先されるべきであろう。この領域に関してわれわれは<……>長期的な貨幣市場の構造変化に比べると、は

資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』名古屋大学出版会、2013年、とくに76-83頁。

31) これは、人口要因を重視する W. アーベルの学説に対立するものである。W. アーベル（寺尾誠訳）『農業恐慌と景気循環 中世注記以来の中欧農業及び人口扶養経済の歴史』未来社、1972年、とくに111-112頁。

32) 南バルト海地域では貴金属の増大は限定的であった。ここで、ラテンアメリカ銀流入による「価格革命」の意義が限定される。

るかに僅かしか知らないのである。」³³⁾

しかし、本稿冒頭でも述べたように、近年では研究が停滞している。ハンザ経済史研究の深化と射程の広がりには比して、貨幣史の領域では概説の範疇を越える大きな成果は現れていない。以下では、現段階で得られる知見にハンザ経済・商業に関する研究蓄積を結びつけながら、「ハンザの貨幣史」にいかなる論点があり、そこにいかなる「ハンザ的特徴」が見出し得るのかを提示したい。

2. 論点の整理

(1) 「ハンザの貨幣」の成立

まずは、「ハンザの貨幣」と呼び得るものがどのように生まれ、それはどのような特徴を有するのかをまとめる必要がある。ハンザ貨幣史叙述をどの地域のどの時点から開始するのは、そもそも「ハンザ」という組織がきわめて漸次的に形成されていったことを考えれば³⁴⁾、議論のあるところであろう。さしあたりドイツ人の東方植民と都市建設をひとつの目印として、リューベックにおける貨幣製造を起点とするのが妥当と思われる。

1158年、ハインリヒ獅子公によりリューベックに貨幣製造所が建設され、アグリッピナ貨(ケルンの模造貨)の製造が始められた。11世紀以降、神聖ローマ帝国において貨幣品位低下が一般的に広まる中で、アグリッピナ貨は例外的に高品位を保ったという³⁵⁾。しかし、当時のリューベック製造貨の出土は少なく、バルト海遠隔地交易または在地交易でどれ程の役割を果たしたのかは明瞭ではない³⁶⁾。現在では、当時のリューベック貨幣は遠隔地交易用に用いられることは少なく、そのほとんどが在地での利用にあてられたと考えられている³⁷⁾。

ハインリヒ獅子公の失脚の後、ペニヒ貨の軽量化が起こった。0.8 0.9gであったものが、0.6gほどに減少したのである³⁸⁾。貨幣の形状も特徴的なものとなり、それまでの両面打造貨から薄広型片面打造貨へと移行した。いわゆるブラクテアート貨である。この種の貨幣製造はドイツ特有の現象である³⁹⁾。ペニヒ貨の軽量化が何を契機として起こったのかは判然としない。

33) M. North, "Einleitung," in North (Hrsg.), *Geldumlauf, Währungssysteme und Zahlungsverkehr*, 5.

34) R. Hammel Kiesow, *Die Hanse*, 5. Aufl., Beck: München, 2012, 21 26.

35) Jammer, *Münzprägung im Herzogtum Sachsen*, 22 23.

36) Hatz, *Anfänge des Münzwesens in Holstein*, 20.

37) R. Hammel Kiesow, *Silber, Gold und Hansehandel. Lübecks Geldgeschichte und der große Münzschatz von 1533/37*, Lübeck 2003, 17

38) Jesse, *Der wendische Münzverein*, 46 47.

39) A. Suhle, *Deutsche Münz und Geldgeschichte von den Anfängen bis zum 15. Jahrhundert*,

いずれにせよ、このような軽量貨幣であっても交易における支払い手段として用いられていたことは確かなようである。ブラクテアート貨の出土地は、リューベックの直接的経済圏と一致する。すなわち、西はハンブルク、シュターデを経由しブレーメン、南はバルドヴィク、リューネブルク、リュッホウを経由しザルツヴェーデルに至る圏域である⁴⁰⁾。この点で、在地市場圏を越えた、ある程度の広がりをもつことができる。

デンマーク王による支配から脱した1226年に、リューベックは皇帝フリードリヒ2世より貨幣製造権獲得した⁴¹⁾。以後、ブラクテアート貨に代わり、ホールペニヒ貨の打造が開始される⁴²⁾。1255年にリューベックはハンブルクと貨幣同盟を締結し、両都市のペニヒ貨について、同等の品位維持と相互流通を約した⁴³⁾。

さて、13世紀後半は、地中海地方で金貨製造が復活し、フランスでは中型銀貨の製造が開始されたことで知られる⁴⁴⁾。1300年頃以降はボヘミアなど神聖ローマ帝国の一部地域でも中型銀貨製造が開始された。しかし北ドイツでは中型銀貨の製造は大きく遅れていた。12世紀以来、交易貨幣として北ドイツおよび西ドイツ地域で大きな役割を果たしたのはイングランドのスターリング貨であったが⁴⁵⁾、それを除けば、北ドイツのハンザ地域はスターリング貨の1/4の価値であるホールペニヒ貨の製造と使用に留まっていた⁴⁶⁾。

ようやく1365年になり、リューベック、ハンブルク、ヴィスマルの間でヴェント貨幣同盟が締結されるに至り、ハンザの貨幣製造に変化が見られるようになる。ヴェント貨幣同盟は、諸都市のみが関与する、すなわち君主・領主権力が関わらない形で貨幣制度が創設されたという点で、ドイツ貨幣史の中でも際立った特徴をもち、そのことにより都市の経済的利害が最優先

Berlin 1971, 86.

40) D. Dummmler, *Die Münzsammlung der Reichs- und Hansestadt Lübeck 1114 1819*, Lübeck: Schmidt Römhild, 2012, 14.

41) Hammel Kiesow, *Silber, Gold und Hansehandel*, 18.

42) 一般的に、ブラクテアート貨とホールペニヒ貨は同義に見られることが多い。H. Halke, *Handwörterbuch der Münzkunde und ihrer Hilfswissenschaften*, Berlin: Georg Reimer, 1909, Art Brakteaten und Hohlpfennige. 一方、ドゥムラーは両者を明確に区別する。Dummmler, *Münzsammlung*, 11, 14. 両者とも片面打造である点では共通している。

43) Jesse, *Münzverein*, 65.

44) 13世紀になるとヨーロッパの各地で銀貨の大型化が始まる（グロッシェン、グロ、グロッソ）が、本稿では後述のグルデン金貨に相当する大型銀貨（グルディナー、グルデングロッシェン、マルク）と区別するために、グロッシェン系列の貨幣を中型銀貨と呼ぶこととする。

45) Sprenger, *Das Geld der Deutschen*, 68. スターリング貨の流入は、ハンザおよびハンザ諸都市の対イングランド交易の黒字によるものと考えられている。1330年頃にはフランスのトゥルノワ貨も見られるようになった。W. Jesse, *Münz und Geldgeschichte Niedersachsens*, Braunschweig 1952, S. 40 f.

46) M. North, "Geld und Münze," in M. Puhle (Hrsg.), *Hanse Städte Bünde. Die sächsischen Städte zwischen Elbe und Weser um 1500*, Magdeburg: Kulturhistorisches Museum, 1996, 427.

されたという⁴⁷⁾。貨幣品位の維持が同盟の大きな目標のひとつであったが、製造される貨幣そのものにも新たな動きがあった。すなわち、スターリング貨相当のヴィッテン貨の製造である。地中海地方での金貨製造に100年ほど遅れて、ハンザ地域で貨幣の大型化が起こったのである。しかし、ヴィッテン貨は4ペニヒ相当に過ぎず、なおもペニヒ貨体系に属するものであり、グロッシュン貨体系に属する貨幣がハンザ経済圏で現れるのは、15世紀前半のシリング貨の生産開始を待たなければならない⁴⁸⁾。ヴィッテン貨の流通地域に注目すると、北海地方とバルト海地方のハンザ交易圏に広く分布していたが、とくにスカンディナヴィア地域が中心であった⁴⁹⁾。

以上に概観した貨幣の製造・流通は、ハンザのいかなる特性と結びつけることができるだろうか。古典として名高いPh. ドランジェのハンザ史概説には、貨幣に関する項目が設けられている。当該書は近年邦訳されたが⁵⁰⁾、今日の研究水準に照らすとやや「時代遅れ」な部分が多くなっており、注意を要する⁵¹⁾。こうしたことから、ドランジェの記述をたたき台として批判的に検討を進めることが、この問題にアプローチするのに有効な手続きであろう。

ハンザ、より正確にはハンザに所属した諸都市およびそれらの政治的・経済的な連携・同盟が、一般的に君主・領主権力から自立的であったことはよく知られている。ドランジェによれば、その傾向は、貨幣制度にも反映されているという。すなわち、ハンザ都市は13世紀の形成期段階から貨幣製造権を獲得することで「貨幣を完全に支配し、自らの交易に利用することに熱心」であったため、「収入源として貨幣を利用することや、たびたび貨幣を変更することを慎んだ」という⁵²⁾。この引用にあるように、バルト海地方の建設都市が君主・領主権力から貨幣製造権を獲得し、その品位維持に努めたことは、12世紀中葉にリュubeckで製造され始めた上述のアグリッピナ貨の例にも当てはまる。ただし、そこで製造されたアグリッピナ貨の流通範囲は広がったとは言えない。アグリッピナ貨に続くブラクテアート貨についても同様のことが言える。ハンザ都市の形成以降製造された貨幣は、必ずしも北海・バルト海地方の東西にまたがる遠隔地交易と結びついたものではなかった。

一方で、14世紀後半から製造され始めたヴィッテン貨は、地理的に広範な重要性を持つようになり、とくにスカンディナヴィア地域で大きな役割を果たした(図2)。しかし上述のよう

47) Jesse, *Der Wendische Münzverein*, S. 27.

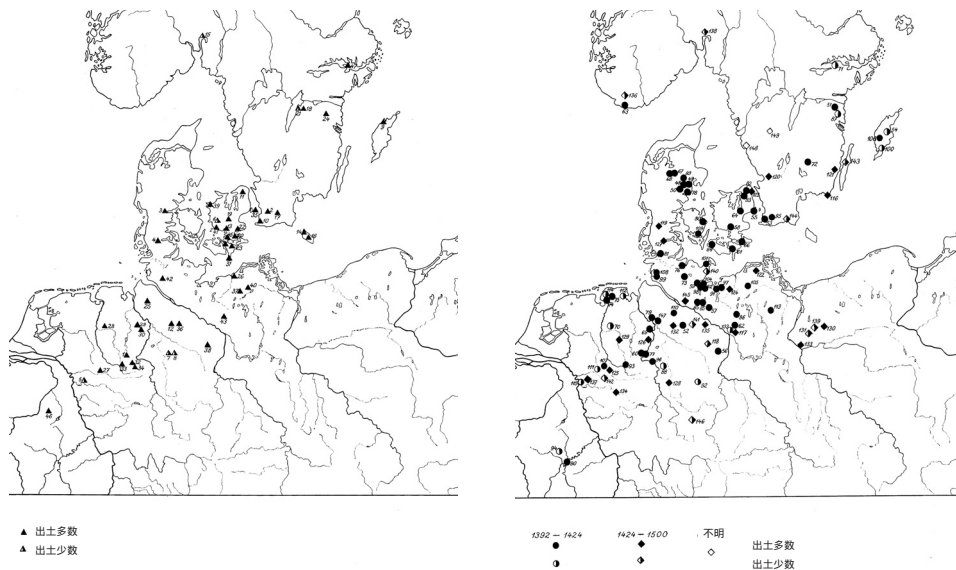
48) P. ベルクハウスによれば、リュubeckはすでに1365年に12ペニヒ相当貨の生産を試みたが、実現しなかったという。P. Berghaus, "Art. Schilling," in *Lexikon des Mittelalters*, Bd. 7, München 1995.

49) Berghaus, "Phänomene der deutschen Münzgeschichte", 112-114.

50) P. ドランジェ (高橋理他訳) 『ハンザ 12-17世紀』みすず書房、2016年 (原著1964年)。

51) 以下の書評を参照。菊池雄太「P. ドランジェ著 (高橋理監訳) 『ハンザ 12-17世紀』 (みすず書房、2016年)」『史苑』第71巻第1号 (2019年) [刊行予定]。同書の初版は1964年、改訂版は1988年の刊行である。

52) P. ドランジェ 『ハンザ』, 219-220頁。



(出典) Berghaus, "Phänomene der deutschen Münzgeschichte," 113 114より引用改変

図2 ヴィッテン貨の出土地 (左: 1392年より前 右: 1392年以後)

にヴィッテン貨はペニヒ貨体系に属し、なおも少額貨幣の範疇に留まっていた。つまり、ハンザ貨幣における銀貨の大型化の進行は緩慢であった。ただし、高額貨幣使用という点で注意すべきは、ハンザは金貨の製造においては神聖ローマ帝国内でむしろ先行する立場にあったことである。その製造開始時期はヴィッテン貨よりも早かった。このことは、どのように理解されるであろうか。

(2) 高額貨幣

ドランジェによれば、「銀本位制と強く結びついていた通貨同盟とハンザ諸都市は、14世紀以降の金貨の拡大を憂慮していた。〈……〉ハンザ諸都市が金貨に対して猜疑心らしきものを持ち続け、銀貨による流通体制に悪影響を及ぼしかねない混乱をおそれて、金貨の使用を制限しようとさえしたことが知られている。〈……〉他の領域と同様に通貨の領域においても、指導者層の伝統主義者としての心性が、全般的な経済の進展とドイツ商人自身の嗜好に逆行する措置を引き起こしたのである。とはいえ、こうした慎重な通貨政策は、問題含みの結果をいくらか残す一方で、ハンザ圏における通貨の相対的安定を保証していたことも認識しておかねばならない」⁵³⁾。

こうした貨幣に対する態度は、研究上「ハンザの保守性」として知られるハンザの特質と一

53) ドランジェ 『ハンザ』, 220 221頁。

致し、ドランジェもそのような捉え方をしていることは明らかである。南ドイツ経済史家 W. v. シュトロマーは、1976年の論文で、このようなハンザの特質が「イノベーションにおける後進性」の要因となったと主張した。ハンザは北海・バルト海商業で特権的地位を獲得することで勢力を拡大し、既得権益をハンザ商人のみに留保することに努めた。それは一時的に成功を収めたが、そのような排他性ゆえに進取の気性が萎み、結局は衰退したという⁵⁴⁾。貨幣史の脈絡に即して言えば、上述のように、ヨーロッパ各地で金貨や中型銀貨の生産と交易における採用が進んだのに対し、ハンザは「伝統主義者としての心性」からくる「慎重な通貨政策」によりそれを拒んだというのが、古典的な解釈である。

ただし、その場合に注目されるのが、金貨の製造である。リューベックに金貨製造権が付与されたのは1340年ときわめて早く、ドイツ地域で最初であった。ブルッヘで金を調達し、イタリア人の親方を招致することで、1341年に金貨製造が開始された⁵⁵⁾。ところが、ドランジェによれば、「それから1世紀半の間、他のヴェント諸都市は言うにおよばず、リューベック独自の金貨を製造する必要はないと判断し、ライン・グルデン金貨の造幣で事足りるとしていた。」⁵⁶⁾

金貨に関するこのような理解は、どこまで適切であろうか。まず、独自の金貨製造の必要性の有無について検討したい。リューベックでの金貨製造が神聖ローマ帝国の中でも早かった理由は明らかではないが、R. シュブランデルはそれを金銀比価と貴金属フローの問題と結びつけて、興味深い指摘をしている⁵⁷⁾。金銀比価が貴金属フローに大きな影響を与えることは、歴史研究においてさまざまに指摘されている⁵⁸⁾。金銀比価が相対的に高い、すなわち金価格が高い地域において、金価格が相対的に低い地域の商人は金貨（あるいは金の延べ棒）を持ち込み、商品を購入し、それを持ち帰り売却することで利ザヤを得ることができる。このことにより、金価格が相対的に高い地域では、金が流入し、その反対に銀が流出する力がはたらく。バルト海地方では、西欧に対して常に金価格が高かった。そのため、同地のハンザ商人は銀の

54) W. v. Stromer, "Der innovatorische Rückstand der hansischen Wirtschaft," in K. Schulz (Hrsg.), *Beiträge zur Wirtschafts und Sozialgeschichte des Mittelalters*, Köln: Böhlau, 1976, 204-217.

55) M. North, *Kleine Geschichte des Geldes. Vom Mittelalter bis heute*, München: Beck, 2009, 27-28.

56) ドランジェ『ハンザ』, 221頁。ライン・グルデン金貨は、ライン地方（マインツ、トリアー、ケルン、プファルツ）の神聖ローマ帝国諸侯によって14、15世紀に大規模生産されたグルデン金貨で、帝国において広域な影響力をもった。

57) 以下の記述は Sprandel, *Zahlungsverkehr*, 140-141.

58) 本稿が対象とする時代・地域に関わる先駆的かつ代表的な研究としては、J. H. A. Munro, *Wool, Cloth, and Gold. The Struggle for Bullion in Anglo Burgundian Trade, 1340-1478*, Toronto: University of Toronto Press, 1972, 30-31. また、たとえばグローバル経済史では A. G. フランク（山下範久訳）『リオリエント アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店、2000年、246-248頁。

流出に直面すると同時に、西欧、とりわけフランドルでは金貨による商品購入を余儀なくされることがあった。金価格が相対的に高い地域を拠点とするハンザ商人にとって、これは不利な取引となった。リューベックにおける金貨製造がフランドル都市ブルッヘでの金購入によって開始されたことは、これと関連付けられる。すなわち、比価の違いから金の購入は財政的に有利であった。それに加え、同市において金貨価値を引き下げることにもつながった。

リューベックで1341年に開始されたグルデン金貨（すなわちフィレンツェを起源とするフィオリノ金貨）の製造は30年ほど続けられたが、徐々に重量を減らし、当初3.6グラムでほぼ純金に近かったものが、1371年には3.34グラムとなった。ここで、金貨の生産は停止する。この時期が、リューベックの金貨製造の第1期である⁵⁹⁾。生産中止の背景は、金貨の軽量化に示唆されるように、おそらく金の供給が十分でなくなったことに求められる。西欧との交易バランスやフランドルの金備蓄の変化がその原因と考えられる。シュブランデルは、ハンザ諸都市における継続的な金備蓄は15世紀末まで不可能であったと結論づけている⁶⁰⁾。しかし、以下に述べるように、ハンザの政策調整のもとで、1406年に金貨の製造は再開されることとなる。以上のことから、経済活動上の理由から、少なくともハンザ商人と諸都市、少なくともリューベックと同市商人にとって、金貨製造の必要性は強く認識され、その継続が試みられたと考えることができる。

次に、ライン・グルデン金貨との関係について、ドランジエの記述には誤解を招く部分がある。上述のように、15世紀初頭に再開されたリューベックの金貨製造では、高品位の維持、すなわちフィオリノ金貨の純度（23 1/2 カラット）の保持が目指された。その一方で、帝国におけるライン・グルデン金貨の貶質は著しく、1419年には19カラットまで純度が低下していた⁶¹⁾。このことは、「金貨に対する猜疑心」と表現されるハンザの金貨に対する態度の解釈にも関連する。つまり、1441年から15世紀後半のハンザの諸都市代表総会（Hansetag）において繰り返し金貨に対する種々の制限が協定されたのは⁶²⁾、金貨全般ではなく、急速に貶質した外来金貨への対応として解釈するべきであろう。品位の低下した外部の金貨に対して、リューベックおよびハンザの「猜疑心」が向けられるのである。それに先行する時期には、リューベック独自の金貨体制の構築が目指されていた。したがって、ハンザが銀本位制を保守するために金貨に対して排他的な態度をとったとみなすことはできない。むしろ、一連のこうした動きの大きな背景として、金貨・銀貨の比価を調整・確定する商業上の必要性を重視するべきではないか。リューベックで金貨製造が再開される直前の1403年以降、ハンザの協約では、ライン・グルデン金貨をはじめとする種々のグルデン金貨の公定純度が検査・記録され、リューベ

59) Dummler, *Münzsammlung*, 16.

60) Sprandel, *Zahlungsverkehr*, 141.

61) Dummler, *Münzsammlung*, 24.

62) Jesse, *Der Wendische Münzverein*, 115.

ック・グルデンと関係づけられたシリング（名目単位）で交換比率が設定された⁶³⁾。1432年には、ヴェント貨幣同盟諸都市（リューベック、ハンプルク、ヴィスマル、リューネブルク）で12ペニヒ相当の中型銀貨であるシリング貨の生産が開始された⁶⁴⁾。品位と比価の安定維持は困難であり、さまざまな変更を余儀なくされたものの、こうして高額貨幣体制は整えられていき、遠隔地交易の展開に貢献したと言える⁶⁵⁾。

さらに注目すべきは、軽量化した金貨に対してもある程度柔軟な姿勢が示されていたことである。15世紀のリューベック・グルデン金貨の生産規模を推し量らせる文書史料は存在しないが、集中的な生産を示唆する証拠がある一方で、不十分であったことを想定させる証拠もある。世紀前半には早くも、リューベック市参事会は外来金貨、とりわけライン・グルデン金貨の流入規制緩和に動く。生産努力がなされる反面、おそらく金の獲得量が不足したことから、市内で生産される貨幣が必要量に達しなかったためであろう。輸入された金貨には特別な印を打刻され、軽量金貨であることが明確にされた⁶⁶⁾。またリューネブルクやハンプルクでは、1434年と1435年に金貨の製造が認められたが、ここでは軽量ライン・グルデンの品位が採用された⁶⁷⁾。

以上のように、ハンザ圏においては金貨製造の開始が時期的に早く、一時的な中断はあったものの再開され、品位保持が目指され、銀貨との関係が慎重に調節された。軽量の金貨に対しても、独自生産のみでは十分でない場合は、ある程度の譲歩と許容が見られた。こうした事柄からは、むしろ金貨に対する積極的姿勢、状況変化に対する柔軟な態度を読み取るべきであろう。

しかし、考古学的証拠から、ハンザ諸都市で生産された金貨の流通範囲および流通規模を大きく評価することはできない。14世紀のリューベック金貨は西方、ライン下流・ヴェストファーレン地域に出土しており、それと比べるとバルト海地方にはあまり見られない⁶⁸⁾。いずれにせよ、ハンザ地域、とりわけエルベ川以東は、総じて「銀遣い」が圧倒的に優勢であったと言える。

それでは、当時のバルト海経済において金貨の比重が低い理由は、どこに求めることができるだろうか。ここまで論じてきたことから明かなように、これをハンザの「金貨に対する

63) Dummler, *Münzsammlung*, 24-25.

64) 1506年にはグルデン金貨に対応するマルク貨（1ライン・グルデン = 1 1/2 リューベック・マルク = 24シリング）が生産されるようになる。

65) D. Dummler, *Der Beginn der Großsilberprägung Lübecks und der Städte des Wendischen Münzvereins anhand des „Großenn Lübecker Münzschatz“ von 1533*, Lübeck: Schmidt Römhild 1999.

66) Dummler, *Münzsammlung*, 28.

67) Ebenda.

68) Berghaus, “Phänomene”, S. 115. ただし、バルト海地方唯一の一括出土地であるシェラン島（デンマーク）のスラーエルセでは、144ものリューベック・グルデン金貨が出土している。

猜疑心」からくる「慎重な通貨政策」の結果として、「ハンザの保守性」のあらわれのひとつとみなす立場をとることは、もはやできない。実態はより単純なものではないだろうか。すなわち、上述した軽量化したグルデン金貨流入に対する妥協の背景として示唆されるような、金の獲得可能性の問題である。

すでに見たように、バルト海地方では金供給が不足していた。14世紀のリューベックにおける金貨製造停止の背景はそれであろうし、状況は15世紀になっても改善されなかった。貴金属の供給は、産出地からの直接的な獲得・購入と並んで、交易を通じてなされるが、15世紀後半以降のバルト海南岸地方の貨幣循環を研究した M. ノルトによれば、同地域において金貨の比重が銀貨に比べ著しく低い理由は獲得できる金が不足していたためであり、それはとりわけ交易を通じた貨幣ないし貴金属循環の問題としてとらえられなくてはならない⁶⁹⁾。

ヨーロッパにおける金の主要な供給源はハンガリーであった。トスカナおよびロンバルド商人が金鉱山開発で活躍し、神聖ローマ帝国領域からはレーゲンスブルク商人もそれに加わったが、14世紀末よりニュルンベルク商人の競争が強まる⁷⁰⁾。ニュルンベルク商人の商業活動を通じて、フランドルやラインラント、南ドイツの毛織物がハンガリーにもたらされ、その対価は金で支払われた。こうした遠隔地交易活動の活性化は、とくにラインラントにおける輸出入税徴収と結びつき、ハンガリーの金が獲得された。この金が、ライン・グルデン金貨の形態でさらに南ドイツへと向けられた。また同時期には、大都市フランクフルト・アム・マインが金の集散地として機能するようになった。さらに、南ドイツ商人は、金鉱山開発へ積極的に進出していた。こうした南ドイツを軸とした活発な交易と投資による金の蓄積に比べ、バルト海地方の金の獲得可能性は低かったのである⁷¹⁾。J. デイはレヴァントにおける対アジア交易の赤字から15世紀におけるヨーロッパの「貴金属飢饉」を説いたが⁷²⁾、ヨーロッパ内部の金の偏在に目を向けると、バルト海地方は明らかな金不足地域であった。

こうしてみると、金貨の使用に関して種々の規制を設け、金貨と銀貨の比率の確定に腐心したのも、金の獲得可能性の低さという文脈から理解できる。すなわち、投機的な金（貨）の取引の結果、金価格が公定相場から離れて高騰することで、金貨生産に支障をきたさないようにするための措置であったと解釈することが可能である⁷³⁾。

金貨をめぐる議論の他に、もうひとつ論及しなくてはならないのは、銀貨の大型化の遅れである。中型銀貨、すなわちフランスのグロ・トゥルノワ貨やヴェネツィアのグロッソ貨が13世

69) North, *Geldumlauf*, 85-104.

70) W. v. Stomer, *Oberdeutsche Hochfinanz. 1350-1450*, 1, Wiesbaden: Steiner, 1970を参照。

71) 以上は、North, *Geldumlauf*, 99-101.

72) J. Day, "The Great Bullion Famine of the Fifteenth Century," *Past and Present* 79 (1978), 3-54.

73) North, *Geldumlauf*, 102.

紀、ベーメンでグロッシェン貨が14世紀前半に製造されていたのに対し、ハンザ地域でその体系に属するシリング貨が登場したのは15世紀前半であった。14世紀後半によりよく製造され始めたヴィッテン貨は4ペニヒ相当であった。P. スパッフオードは、ハンザ諸都市の交易活動の規模が小さかったために、銀貨の大型化が必要とされなかったと、手短に指摘している⁷⁴⁾。私見に従えば、このような理解は大枠において賛同できる。ただし、「商業活動規模の小ささ」という点については、より厳密にする必要がある。銀貨の大型化にここまでの大きな時間差が生まれるほどにハンザの商業規模そのものが小さかったと想定するのは、難しいと思われる。むしろ、個々の取引の形態と規模に着目し、それが銀貨の大型化とどのように関連しているのかを問うべきであろう。上記したように、ハンザ・バルト海経済圏は銀が流出しがちな構造をもっており、金の獲得・蓄積も困難であった。これに対応した取引形態と規模がとられるようになったのではないだろうか。これについては次項で論じる。

(3) 非現金取引：バーター交易と信用

そもそもバルト海地方におけるハンザ商品交易では、どれほど現金決済が必要とされたのであろうか。現金貨幣による支払い、現金貨幣の輸送をできる限り省くためには、バーター取引か信用取引が利用され得る。高度な信用取引について論じる前に、まずはバーター取引について考察したい。レーヴァル商人の帳簿を分析した G. ミックヴィッツによれば、16世紀に至っても、レーヴァル、ドルパト、ナルヴァにおけるロシア商人との取引では、商品対商品の交換が主要形態であり、それに加えて地金または計量された銀貨が支払い手段として用いられたという⁷⁵⁾。12～15世紀のノヴゴロドにおけるロシア交易で、西方からロシアへ輸出された主要商品のひとつは銀地金であった⁷⁶⁾。リューベックにおいても、銀地金が支払い手段として利用されていた⁷⁷⁾。このように、ハンザの遠隔地東西交易においては、バーター取引が広く行われたと考えられる。したがって、ハンザ商人やハンザ諸都市にとって、バルト海地方（東方交易）において大型の貨幣を用いる必要性は少なかったであろうと考えられる。

このようにバーター取引が優勢であった背景は何か。進歩史観的な観点から、貨幣経済の未発達、後進的な商取引形態——「ハンザの後進性」——と結論づけられるであろうか。上述の

74) P. Spufford, *Money and its use in medieval Europe*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988, 233 234.

75) G. Mickwitz, *Aus Revaler Handelsbüchern. Zur Technik des Ostseehandels in der ersten Hälfte des 16. Jahrhunderts*, Helsingfors: Akad. Buchh. [u. a.], 1938, 33.

76) E. Harder Gersdorff, “Hansische Handelsgüter auf dem Großmarkt Novgorod (13 17. Jh.): Grundstrukturen und Forschungsfragen,” in N. Angermann / K. Friedland (Hrsg.), *Novgorod. Markt und Kontor der Hanse*, Köln: Böhlau, 2002, 135. ほかの商品として、毛織物、塩、ニシンや、銅、錫、鉛等の卑金属が挙げられる。

77) Dummler, *Münzsammlung*, 14 15.

ように、貴金属の獲得・蓄積のための条件が不利であったことがバルト海地方での交易活動におけるそもそもの前提であったとすれば、それに適応的なシステムが発展したのだと評価する方が適当ではないか。この観点を支持する論拠として、近年の研究が強調するハンザ商人の事業形態の特性が挙げられる。すなわち、ハンザ商業においては、各地の市場や特産品に特化的に習熟した商人同士が緊密なネットワークを結んだ上で、短期パートナーシップを個別分散的に行う事業形態が選好され⁷⁸⁾、このことにより取引費用が節約された。このような事業形態各地域での特化、個別的かつ短期的なパートナーシップは、取引にかかる資金を抑え、商品取引と決済のパターンをよりシンプルにしたと考えられる。そのためバーター取引にも適合的であり、貨幣節約的であったのではなかろうか。取引パートナーが互恵的に取引業務を行うことで、委任された業務に対する支払いをせずに済ます「互恵的取引 Handel auf Gegenseitigkeit」が行われていたことも⁷⁹⁾、現金の使用を減じさせたであろう。

それでは、信用の利用による貨幣節約についてはどうであろうか。ドランジェはハンザの信用取引について、以下のように述べる。「さらに驚くべきは、リューベックにおいてすら、信用取引がハンザ支配者層の敵意を引き起こしていたことが確認される点である。いったい彼らは信用取引のどのような点を非難したのだろうか。本質的な点は、価格が不安定となり、その結果として取引が混乱をきたす点にあると言える。＜……＞危険な商業活動への誘惑をいや増し、さらには良心の乏しい商人による不実な行為を助長することで、ハンザ商人の名声を貶めることになることも、信用取引への不満の種となった」⁸⁰⁾。

これは、いわゆるハンザの「信用嫌い Kreditfeindlichkeit」と呼ばれる古典的解釈である。今日の研究では、「信用嫌い」をハンザの一般的特性とみなすことはできないと考えられている。ハンザの総会で信用取引禁止が発令されることはあったとしても、それは当時の政治外交上・経済上の特殊事情に起因するもので、ハンザの商人による信用取引は一般的なものであったという⁸¹⁾。また、W. シュタークによれば、ハンザ商人は自らの信頼と評判の維持に腐心していたが、その背景には信用貸しの利用があった⁸²⁾。さらに、ロシア交易の例でも、信用の利

78) A. Cordes, *Spätmittelalterlicher Gesellschaftshandel im Hanseraum*, Köln: Böhlau, 1998, 193 197; Hammel Kiesow, *Hanse*, 91. S. Selzer u. U. Ewert, “Verhandeln und Verkaufen, Vernetzen und Vertrauen. Über die Netzwerkstruktur des Hansischen Handels,” *Hansische Geschichtsblätter* 119 (2001), 135 161.

79) Mickwitz, *Aus Revaler Handelsbüchern*.

80) ドランジェ 『ハンザ』, 217 218頁。

81) S. Jenks, “War die Hanse kreditfeindlich?,” *Vierteljahrschrift für Sozial und Wirtschaftsgeschichte* 69 3 (1982), 305 338.

82) W. Stark, “Über Techniken und Organisationsformen des hansischen Handels im Spätmittelalter,” in S. Jenks / M. North (Hrsg.), *Der hansische Sonderweg? Beiträge zur Sozial und Wirtschaftsgeschichte der Hanse*, Köln: Böhlau 1993, 196 198.

用がなされていたことが強調されている⁸³⁾。

しかし、現段階の研究においても、ハンザの信用取引および非現金決済がその他の商業地域と比較して発達してはいなかったと認められている。ハンザ4大商館のひとつが置かれたブルッヘは、13世紀に北方ヨーロッパにおける金融中心地となったが、14世紀前半の同時代文献によると、為替により結びついていたのはフィレンツェとジェノヴァであった⁸⁴⁾。ノルトは北ドイツにおける信用制度の未発達を認め、南ヨーロッパや西ヨーロッパのみならず、南ドイツや西ドイツと比較しても立ち遅れていたとする⁸⁵⁾。ハンザと信用取引に関する研究そのものが不十分であるため、さらなる検討が必要とされる課題である⁸⁶⁾。

(4) 貨幣制度と通貨圏

貨幣制度を含むハンザの経済制度を論じる場合、ハンザの「盟主」とされるリューベックがどれほど中心的な影響力をもっていたのかが大きな論点となる。つまり、リューベックを中心とする制度的統一によってハンザ構成員に共有される基本構造が存在していたのか、あるいは、そのような構造があるとしても、それはどの程度の一体性を持つものであったのか、さらにリューベックの役割はどこまで評価できるのか、という問題である。

ドランジェにおいては、たとえばリューベックを中核としたヴェント諸都市による「都市同盟」が母体となって形成された「都市ハンザ」がハンザの完成体であるとして、ハンザ組織の成立におけるリューベックの主導的地位が強調される⁸⁷⁾。また、K. フリートラントは、ハンザ商人共同体をあらわす同時代概念である「われら商人 *der gemeine Kaufmann*」の結束を、「低地ドイツ語の法共同体」という枠組みでとらえたが、その際にリューベック法に大きな意義を与える⁸⁸⁾。すなわち、外地で取引活動を展開するハンザ商人が獲得・形成した法または権

83) A. L. Choroškevič, “Der Kredit im Hansehandel mit Pleskau nach den Materialien des Gesprächs und Wörterbuches von Tönnies Fonne,” in Jenks / North (Hrsg.), *Novgorod*, 211 226.

84) M. Denzel, *Das System des bargeldlosen Zahlungsverkehrs europäischer Prägung vom Mittelalter bis 1914*, Stuttgart: Steiner, 97 98.

85) M. North, “Banking and Credit in Northern Germany in the Fifteenth and Sixteenth Centuries,” in Società Ligure di Storia Patria (es.), *Banchi pubblici, banchi privati e monti di pietà nell’Europa preindustriale. Amministrazione, tecniche operative e ruoli economici*, Genova: Società Ligure di Storia Patria, 2, 1991, 810 825.

86) M. North, “Kredit Instrumente in Westeuropa und im Hanseraum,” in N. Jörn et. al. (Hrsg.), *Kopet uns werk by tyden. Beiträge zur hansischen und preußischen Geschichte*, Schwerin: Thomas Helms, 1999, 45.

87) ドランジェ『ハンザ』, 58 60頁。

88) K. Friedland, “Der Gemeine Kaufmann,” in N. Jörn, D. Kattinger u. Horst Wenicke (Hrsg.), *Genossenschaftliche Strukturen in der Hanse*, Köln: Böhlau, 1999, 287 294. 13世紀にエルベ川以東で都市建設が本格化し、リューベック法を付与されたバルト海南岸の新設都市はリュ

利が、さまざまな出身地から成る商人たちの仲間団体化を促し、それがやがてリューベックの都市法体系に吸収・集約化されていくという。

リューベックにハンザ史の重心を置くこうした見方は、近年では相対化される傾向にある⁸⁹⁾。貨幣に関する論考ではないが、S. グスタフソンは、バルト海地方における都市の商品取引規制の地域間比較、すなわちイングランド、ドイツ、デンマーク、スウェーデン諸都市における商品取引に関する規制の類似点・相違点の検証を行った。その結果、諸地域の制度間における相互関係を測ること、具体的にどの地域からどの地域へいつ頃影響が及んだのかを捕捉することは非常に困難であることが示され、とりわけ文面上の規定のみでリューベックの影響力を語ることの危険性が主張された⁹⁰⁾。

以上の論点に関して、貨幣史研究はひとつの示唆を与える。ハンザの貨幣制度について、ドランジェは以下のように述べる。「多様な貨幣が並存していたことが、ハンザ商業にとってかなり深刻な障害であったのは間違いないだろう。〈……〉ハンザが安定した組織となっていた14世紀を通じてさえ、ハンザ圏内で統一的な貨幣制度を計画することさえもできなかった。」⁹¹⁾しかしそうした中で、ヴェント通貨同盟にはきわめて大きな意義を与えている。「ハンザ圏で大きな役割を果たすことになったのは、ヴェント都市の通貨同盟だけであった。〈……〉この通貨同盟は、厳密な意味ではリューベック、ハンブルク、ヴィスマル、リューネブルクという4都市のみの連合であった。しかしロストックやポメルン都市であるシュトラールズント、グライフスヴァルト、シュテティーンも一時的には加わり、ヴェーザー川とオーダー川間のその他の都市とデンマークは、参加はしなかったが、自身の通貨をこれに合わせて調整した。その結果として、ヴェント通貨同盟は事実上スカンディナヴィアを含む、かなり広範な地域において影響力を発揮した。」⁹²⁾

このように、古典的な解釈では、リューベックを中心とした通貨同盟が公式、非公式に及ぼした広範な影響力が強調されている。また、ハンザ地域・北欧の支払いシステムを論じたシュブランデルは、「上位通貨」としてのリューベックの貨幣（制度）が果たした役割を指摘する。ここで言う上位通貨とは、ある特定の広域地域において採用された、「内国通貨」に続く第2、第3の「外国通貨」である。ただしここで「上位貨幣としての役割」といった場合に注意すべ

ーベック法家族を形成した。内陸地域ではマクデブルク法が中心的な役割を果たした。

89) 菊池「P. ドランジェ著『ハンザ 12-17世紀』」参照。

90) S. Gustafsson, "Sale of Goods around the Baltic Sea in the Middle Ages," in J. Wubs Mrozewicz / S. Jenks (eds.), *The Hanse in Medieval and Early Modern Europe*, Leiden: Brill, 2013, 129-148. 近接した地域における商取引形態は類似性が高くなると考えられ、そこで引き起こされる商取引上の問題、それに対する措置・規制も必然的に似通うため、リューベックが制度の発信源であるとアプリオリに認めることはできないという。

91) ドランジェ『ハンザ』, 219頁。

92) ドランジェ『ハンザ』, 220頁。

きは、ある地域で上位通貨たる貨幣そのものが流通していたというだけでなく、当該貨幣がその地で模造されたこともそれに含まれるという点である。支払い手段として広範な影響力をもった貨幣は、各地で積極的に生産され、使用された。シュプラデルは、そのような上位貨幣の模造を重視するのである。すでに14世紀中葉以前に、北欧や北海地方でイングランドのペニヒ貨であるスターリング貨の模造が確認される。ただし、15世紀初頭以降にデンマークで製造されたスターリング模造貨は、交換価値的には1370年以前のスターリング貨と同等で、当時としてはリューベックのドライリンク貨（3ペニヒ貨）にカテゴライズされるという。14世紀中にはフランスの中型銀貨グロ・トゥルノワ貨およびそれから派生したフランドルのグロート貨も影響力をもつようになるが、流通あるいは模造地域はスターリング貨ほどの広がりをもたず、北海沿岸の一部地域が中心であった。14世紀末以降は、それにリューベックの通貨が加わる⁹³⁾。こうして、15世紀には大きくふたつの上位貨幣から成る「通貨ブロック」が形成されていった。すなわち、ひとつがフランス＝フランドル・ブロック、もうひとつがリューベック・ブロックであった⁹⁴⁾。

以上までを踏まえれば、リューベックを中心としたハンザの通貨制度と通貨圏の創出を想定することには、一定の根拠があるように考えられる。しかし、ここで見落としてはならないのが、リューベック通貨圏（リューベック・マルク圏）と並ぶ、ズンド通貨圏（スンド・マルク圏）の存在である⁹⁵⁾。14世紀前半から、バルト海南岸の重要ハンザ都市であるロストクとシュトラールズントは、独自のマルク通貨体系を形成した。計算単位として1マルク＝16シリングが192ペニヒに相当するのは同様であるが、ズンド＝マルクの価値はリューベック＝マルクに対して常に低かった。ロストクとシュトラールズントは1360年代にヴェント貨幣同盟に参加し、同盟のヴィッテン貨生産体制に歩調を合わせるようになるが、自らの計算体系は維持され続けた⁹⁶⁾。両都市で製造されたヴィッテン貨はリューベック通貨圏で両替されることなく正貨として受け入れられたという。しかし1387年に、両都市はヴェント貨幣同盟から除名される。同盟によりズンド系貨幣は禁止され、1389年にはズンド系貨幣の評価を切り下げる形で交換比率が変更された⁹⁷⁾。除名の理由は明らかではないが、状況から見てズンド系貨幣の品位低下が大き

93) 以上は Sprandel, *Zahlungsverkehr*, 21-23.

94) Sprandel, *Zahlungsverkehr*, 26.

95) Th. Lux, "Aspekte des mittelalterlichen Münzwesens," in J. Mähnert / S. Selzer (Hrsg.), *Vertraute Ferne. Kommunikation und Mobilität im Hanseraum*, Husum: Husum Druck und Verlagsgesellschaft, 2012, 68.

96) 1.5ズンド・マルク＝1リューベック・マルク；1ズンド・マルク＝2/3リューベック・マルク（10シリング8ペニヒ）。

97) 以上は G. Stefke, "Sundisches, lübisches und flandrisches Geld und der kaufmännische Wechselverkehr zwischen Brügge und Stralsund im ersten Jahrzehnt des 15. Jahrhunderts nach Hildebrand Veckinhusens Buchführung und anderen gleichzeitigen Quellen," in N. Jörn et. al. (Hrsg.), *Kopet uns werk by tyden*, 33-34.

な要因であったであろう。こうしてみると、リューベックおよびヴェント貨幣同盟による広範な影響力を語ることは難しいと言えよう。

さらに、上記した、模造を通じた上位通貨による通貨圏の創出に関しても、異論が投げかけられている。ロストクやシュトラールズント等、ヴェント貨幣同盟諸都市以外で製造されたヴィッテン貨が、当該同盟のヴィッテン貨の模造であったとする模範 模造関係によって、通貨の「秩序システム」が形成されていたという認識が、イエッセの古典的研究によってなかば「正典化」されているが⁹⁸⁾、実際にはそのことを示す根拠は存在せず、放棄せねばならないという⁹⁹⁾。

貨幣制度の非統一性は、プロイセン地方のドイツ騎士団の例からも明らかである。騎士団領の貨幣システムは、ハンザないしヴェント通貨同盟のシステムからは明確に分離しているという¹⁰⁰⁾。ドイツ騎士団は、自由な諸都市の連携組織であるハンザとはまったく異なる性質、すなわち国家的制度形成の枠組みの中で、独自の通貨体制を打ち立てていったのである¹⁰¹⁾。

以上を踏まえれば、ハンザ地域における貨幣制度について、統一性はおろか、リューベックを中心とした貨幣同盟の役割についても、「広範な地域において影響力を発揮した」と一概に言い切ることは困難であろう。貨幣・通貨制度は地域的に多様であり、それらの諸関係は複雑であった。それならば、「ハンザの貨幣史」という問題設定は、そもそも可能であろうか。可能であるとすれば、いかなる研究の方向性が今後考え得るであろうか。研究史と諸論点についてここまで考察してきた結果をもとに、この点について展望を示したい。

展 望

「ハンザの貨幣史」について語ろうとするのであれば、地理的に相当程度広範な空間設定が必要である。貨幣循環、支払いシステム、貴金属フローといったテーマについては、重要な成果が出され、知見が蓄積されてきた。一方で課題としていまだ残されているのが、中世における特定の広域商業圏——ハンザ商業——の交易サイクルを円滑に動かす「血液」として、貨幣がいかなる特徴をもち、制度として機能してきたのか、システム論的な観点からとらえる研究であろう。これは、ハンザの特徴を貨幣という観点から浮き彫りにすることにつながるので、ハンザという事象を歴史的・経済史的に同定する作業であると言える。

このような問題視角を提示した上で、本稿では、現段階の研究水準をでき得る限り総合的に

98) Jesse, *Der Wendische Münzverein*.

99) Stefke, "Silbergeld Problem," 63 64.

100) Lux, "Aspekte des mittelalterlichen Münzwesens," 68.

101) ドイツ騎士団の貨幣政策については O. Volckart, *Die Münzpolitik im Ordensland und Herzogtum Preußen von 1370 bis 1550*, Wiesbaden: Harrassowitz, 1996.

踏まえて古典説の検証が行われた。論点のひとつは、ハンザ地域において銀貨の大型化が際立って遅れ、ペニヒ貨の利用が続けられていたこと、金貨が重要性をもつことがなかったことをどのように理解するべきか、であった。高額貨幣政策、原料となる貴金属の獲得と蓄積の問題、取引における商品交換形態等の検証から、この現象を「ハンザの保守性」ないし「後進性」の結果とみなすことはできず、むしろ当時の商業活動の現実や時期的な必要性に合わせた選択のあらわれとして理解すべきである。地金を含むバーター取引が遠隔地取引において優勢であったのも、ハンザ経済の遅れとして処理してしまうよりは、地域的・時代的条件に適応した取引形態の一環として位置づけられる。つまり、ハンザ経済・商業の実態面により即した理解が必要である。

かつてのハンザ史研究で根強かった、ハンザ体制をリューベックの主導性に重きを置いて説明しようとするいわゆる「トラーヴェ中心史観」は、現在の研究で見直しが行われている。貨幣制度、通貨圏についても、同様のことが言えよう。つまり、リューベックおよびヴェント貨幣同盟のシステムには組み込まれない地域性と多様性が内包されていたことが、ハンザの特徴と言える。しかし、そのような地域性と多様性の中で、全体がゆるやかに機能したと想定することは可能であろう。そうした観点に立つと、異なる制度をもつ諸地域間をリンケージさせるようなメカニズムがいかにして実現されたのかを検討する必要がある。別の見方をすれば、そのようなメカニズムこそがハンザなのではないか。リューベックの中心性は、そのような調整機能、いわばプラットフォームとしての役割に求めるべきと思われる。

ここで注目されるのが、Ph. カーティンの「交易離散共同体」論であり、彼が『異文化間交易の世界史』の中でハンザも「交易離散共同体」に加えている点である¹⁰²⁾。これが本稿の議論とどのような関連をもつか、当該書籍の訳者のひとり山影進による解題をもとに考えてみたい。さまざまな地域に離散（ディアスポラ）し、各々が各地に共同体を形成しつつ互いの結びつきにもとづいて異文化間交易を担ったのが、「交易離散共同体」である。その主要機能のひとつは、「共通文化ないし融合文化の生成」である。「異文化間交易が何世紀か続き、制度化が進むにつれて、交易で結びついている異なる社会に交易に関するセクターの中に共通要素が浸透する。それは、意思疎通手段としてのリング・フランカであり、長距離取引を円滑化する為替・生産制度であり、金融制度である。共通化した交易文化要素は徐々に各々の社会に浸透していく。〈……〉異なる社会の間で基層文化は当然に異なっているが、交易離散共同体の文化（の一部）を受け入れることによって、それらの間にはさまざまな共通性が現れて来る。究極的には、交易で繋がっている異文化社会間で文化の平準化（平潤化）が進行する。」¹⁰³⁾

つまり、異文化（本稿の文脈ではハンザ地域内の制度・システムの多様性）を前提としつつ、各地に共同体が離散し（ハンザ商人が各地で商館や都市を建設し活動すること）、互いが境界

102) Ph. カーティン（田村愛理ほか訳）『異文化間交易の世界史』NTT出版、2002年、31、36-37頁。

103) カーティン『異文化間交易の世界史』、17頁。

を越えて結びつく（ハンザ商人のパートナーシップ形成や商館での交易活動に加え、諸都市代表会議による政策協議・調整や貨幣同盟のような連携）ことで、制度的・文化的な共有性が高まる。

ただし、このような「交易離散共同体」の平準化・平潤化機能の強弱をどのように評価し、均質化へ向かう力学をどこまで強調するのは、慎重な判断を要する。たとえば、バルト海地方全般で金貨が重要性をもたなかったのは、「ハンザの保守性」が浸透、共有されていたからではなく、地域の経済条件という基底部分へ対応した結果と考えられる。一方で、高額貨幣を必要としない取引形態、事業形態の展開は、離散共同体による交易文化の共有が大きな役割を果たしていたと言えよう。

また、ハンザ商業圏は常に多様であり、共通性とともにより多彩な地域的特性を包含し続けていた。貨幣システムのあり方も、ブルッヘとリューベックでは大きく異なる。バルト海地方内部でも、異なる通貨圏が並存していた。しかし、別の見方をすれば、それこそがハンザが必要とされ、中世の長きにわたり存続した理由とも言える。カーティンによれば、「交易離散共同体」の役割は、異文化社会間の媒体となることであるので、その存在意義は、異質で差異のある社会の存在を前提としている。社会間での差異がなくなれば、存続する理由を失うのである¹⁰⁴⁾。地域的多様性・異質性をそのままに保持しつつ調整するメカニズムが、ハンザであったと考え得るのではないか。それを必要としない新たなシステムが生まれるまで、ハンザは存続できたのである。ハンザの貨幣史は、多様な特性をもつ地域同士がいかに連動したのか、それを可能にした制度はどのように設計され、運用されたのか、担い手はどのようなパターンで取引と支払いを行ったのか、という観点から、よりミクロな方向で研究される必要があるだろう。

〔付記〕

本研究は、JSPS 科研費（課題番号16H01953）の助成を受けたものである。

104) カーティン『異文化間交易の世界史』, 18頁。その意味で、社会の平準化を推進する「交易離散共同体」は自己破壊的であるという。